

いなかとまちのくるま座ミーティング

第2部 くるま座ミーティング

第1部の基調講演の後、移住・定住分科会、次世代育成分科会、スマールビジネス分科会とテーマごとに分かれ、参加者同士が語り合いました。

移住・定住分科会

移住・定住分科会は、移住者を受け入れる側の集落がどのように取り組むべきか、をテーマとし、NPO法人奥矢作森林塾理事長の大島氏をお招きして、恵那市串原でのリフォーム塾についてのお話を伺いました。大島さんは都会に住んでい

は、空間、時間、人間関係の3つの「間」によって育まれ、農山村は、その3つを作っていくのに丁度良い環境です。現在までに11万名の参加者を受け入れ、「子どもが自ら育ちあう」ための活動を実践してきた、アルプス子ども会代表の綾崎氏に取組をご紹介いただき、その後参加者同士で話し合いをしました。

スマールビジネス分科会

スマールビジネス分科会は、「地域で暮らしの糧を得る」をテーマに進められました。前半は、岡崎市額田地区に



移住・定住専門部会のくるま座ミーティングの様子

ターンした唐澤さん、長野県根羽村にIターンした南木さん、旭地区にIターンした戸田さんに、それぞれが地域で色んな役割・仕事をしながら、それぞれの糧を得て暮らしていることについてお話しいただきました。アドバタイザーとして参加された結城先生曰く、「現代の都市は、『糧』を『金』とイコールで考えるが、『糧』というのはそこにあるものを活かす知恵、技のことであり、それがないと身近にあるものが活かされるべき資源に見えてきません。」後半のディスカッションでは、参加者から「漬物を漬ける技をおばあちゃんから教えてもらいたい」「柿洪と和紙を合わせたらどんなふうになるだろうか」など、古くて新しい糧が生まれそうな様々なアイデアが出されました。

3つの分科会に分かれて話し合いが

持たれた後、参加者全体で集まって、話題提供者、コーディネーターからそれぞれ分科会のまとめ、感想の報告がありました。まとめの最後には、太田市長も感想、意見を発表しました。「豊田市を、子や孫に残したいのであれば、豊田で、愛を持って消費しなければならぬ。行政は、"we love とよた"をキャッチフレーズとして取り組んでいくが、"とよた"



基調講演でお話をされた結城先生と、太田市長

の部分は、「小原」になってもいい。地域に愛を感じて、お金を落とせば、豊田市全体がさらに魅力的になつていくと思います。地域を愛してやっっていくという方向は、今日の皆さんのお話の中にベースがすでにあると思われ、心強く感じました。」

参加者の皆さんからは、「基調講演の結城さんのお話で、農山村にはまだまだ資源が眠っていること、それを活用する知恵と技術の継承が大切だと理解しました。」「くるま座ミーティングに参加して、同じ想いの方がいることを知り、意識が高まりました。」など、この一日が学びの場になった、という感想が多く寄せられました。

東萩平暮らしの参観日



旭 ASAHI

1月24日(土)、豊田市山間部の東萩平町で、空家3軒の内覧会を行い、子育て世代を中心に11世帯30人(うち幼児7人)の参加がありました。東萩平町は22世帯、平均年齢は70歳に近く、高校生以下は4人、という集落です。当日は、空き家を見学するだけでなく、周辺を散策したり、地



域の住民と一緒に昼食をとったりしました。漠然といなかで子育てしたいと考える移住希望者にとっては、地域の雰囲気やわかるというメリット、地域の住民にとつては、どんなひとが移住してくるのかというイメージができるメリットがあり、お互いに有意義な時間を過ごしていました。



里山体験くじねんじよ編く開催



足助 ASUKE

1月31日(土)、『里山体験くじねんじよ編く』を、足助・すげの里で主催しました。12月に名古屋テレビ塔で行った「大ナゴヤ大学連携」田舎女子トーク」の続編として、企画したものです。名古屋、豊田市などから親子連れを含む11組が参加し、旭にあるじねんじよ農家のお嫁さんに教わりながら、じねんじよ料理に取り組みました。



そべ揚げ、じねんじよドリア、じねんじよドーナツ、じねんじよサラダ、じねんじよの煮物、じねんじよの味噌汁、じねんじよの漬物・・・と、まさにじねんじよづくしの盛りだくさんなメニュー。大人は皆で和気あいあい、おしゃべりしながら料理し、子どもたちは、外で薪割りを教えてもらったり、池の周りでワイワイ遊んだり、散歩したり、里山ならではの時間を満喫していただけたようです。

